

神のことば・人のことば

——歌語・地名など——

池田三枝子

一 問題意識

歌語が歌語として成り立つ根拠は、従来、発生論・起源論の観点から、地名の場合と同様に、神のことばを装うことにあるとされてきた。

例えば、大和にかかる「そらみつ」という枕詞の起源譚として次のような神話がある。

饒速日命、天磐船に乗りて太虛を翔行り、是の郷を睨みて降りたまふに及至りて、故、因りて目けて、「虚空見つ日本之國」と曰ひき。

(『日本書紀』神武天皇三十一年四月条)

この起源譚は「そらみつ」の本来的な起源ではなく、既に分からなくなっていた「そらみつ」の語義を後代的論理で捉え返して、空から大和を見て饒速日命が天降ったという再解釈を行なつたものと考えられる。ここからは、「そらみつ」という語が神の言行に根拠づけられることにより、日常語とは異なる呪的修飾句として成立している様相が看取できる。神のことばを根拠として歌語が成立するというあり方は、原理的には了解で

きる。

だが、次のような例はどのように考えればよいだろうか。

大汝 少彦名の 神こそば 名付けそめけめ 名のみを
名児山と負ひて 我が恋の 千重の一重も 慰めなくに

(『万葉集』卷六・九六二、大伴坂上郎女)

右は、天平二年(七三〇)十一月、大宰府に下向していた大伴坂上郎女が帰京する旅の途中で、筑前国宗像郡にある名児山の地名起源に興味を覚えて詠んだ歌である。

坂上郎女詠の名児山の地名起源譚を考える際には、「丹後國風土記」逸文の奈具社の由来譚が参考になる。奈具の村にやつて来た天女が「此處に我が心なぐしく成りぬ。古事に平けく書き」とを奈具志と曰ふ」と言つて村に留まり、奈具社に鎮座し、その祭神豊宇加能売命となつたといつ伝承である。奈具社の場合、神の発したナグシの語が奈具という地名の起源となつてゐる。坂上郎女詠の名児山も「心が静まる」意のナグの語に由來し、そのナグの語を発したのは「大汝」「少彦名」の神であつたといふことになろう。

奈具社や名児山の起源譚も本来的な起源であるとは考え難

く、既に分からなくなつてゐた奈良・名児山の語義を後代的論理で捉え返して、「心が静まる」意の神のことばとする再解釈を施したものと推察される。神のことばとして捉え返すことにより呪的イメージが付与されるというあり方は、「そらみつ」の起源譜と同様である。

しかし、坂上郎女詠で名児山の起源が「名のみ」であると断じられていることは看過できない。坂上郎女は「我が恋の千重の一重も 慰めなくに」という現実的事象に基づいて、神のことばを根拠とする地名起源を否定しているのである。ここには、あることばを解釈するにあたり、神の世界に淵源する呪力ではなく、人の世界の現実的事象を優先させて考える思考法が仄見えている。

歌のことばが原理的に神のことばの装いを持つとしても、歌が人によつて詠まれる以上、そこには人の世界の事象が介入する余地がある。右のような例の存することを考慮に入れると、「万葉集」には、神の世界と一線を画した人の世界の事象を根拠とする歌語といつものが想定できるのではないか。

本稿では、かかる問題意識から、人の世界の事象に基づく歌語について考察し、ことばを人の世界の事象として捉え返すという技法が修辞として如何なるものであつたのかについて考えてみたい。

二 「み熊野」と「ま熊野」

「万葉集」中、特定の地名に接頭語ミが冠されるのは吉野と熊野だけである。そこには、特定の地名を他と差異化して特別

な意味を付与しようとする力が働いている。したがつて、接頭語の冠された「み吉野」「み熊野」は単なる地名ではなく、歌語と見ることができるのである。

熊野には、他に接頭語マが冠される場合がある。地名に接頭語マを冠する例は「ま熊野」以外ではない。記紀・風土記など他の上代散文で地名熊野に接頭語を冠する例がないことからしても、「み熊野」「ま熊野」はそれぞれ異なる意味合いで持つ歌語として成立していると考えられる。そこで以下、「み熊野」「ま熊野」が如何なる意味を持ち得ているのか考察してみたい。

「み熊野」は次の①の一例、「ま熊野」は②③の一例であるが、他に接頭語を冠されない「熊野」の例として④があるのである。

①み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも
（巻四）四九六、柿本人麻呂

②島隠り我が漕ぎ来ればともしかも大和へ上のま熊野の船

（巻六・九四四、山部赤人）

③御食つ国志摩の海人ならしま熊野の小船に乗りて冲辺漕

ぐ見ゆ
（巻六・一〇三三、大伴家持）

④浦廻漕ぐ熊野船着きめづらしく懸けて偲はぬ月も日もな

（巻十一・三一七一）

これら「万葉集」中の熊野は、ほぼ異論なく紀伊国牟婁郡の熊野とされている。「万葉集」の当時、紀伊の熊野が一般にどのような土地として認識されていたのか確認するために、①～④の考察に先立ち、「万葉集」以外の上代文献に見える「熊野」を検討すると、およそ次の(1)～(4)に分類できる。

- (1) 神武東征伝承
- (2) 島隠り我が漕ぎ来ればともしかも大和へ上のま熊野の船
- (3) 御食つ国志摩の海人ならしま熊野の小船に乗りて冲辺漕ぐ見ゆ
- (4) 浦廻漕ぐ熊野船着きめづらしく懸けて偲はぬ月も日もな

(d) 船に関わる神話・伝承
(e) 出雲の熊野

(f) その他

熊野のクマは「猛く荒ぶるものを指す称」「元来は『隈』で、

奥まつた所の意」とされ、熊野という地名は紀伊以外にも存在する。それゆえ、当該の紀伊の熊野とは明らかに異なる(1)と、

特定の地との関係を認めがたい(2)はとりあえず描く。

まず(1)神武東征伝承から見てみよう。伝承は「古事記」「日本書紀」「伊勢國風土記」逸文に見え、それぞれ相違はあるも

の、後に神武天皇となるカムヤマトイハレビコが大和入りする前に紀伊國の熊野に至つたとする点は共通している。「古事記」に挿れば、カムヤマトイハレビコは「熊野の村」で荒ぶる

神である大熊の毒氣に當てられて昏倒し、高倉下から獻上され

た靈劍の威力で窮地を脱する。そして次に「吉野河の河尻」に

至り、贊持之子・井水鹿・石押分之子といふ國つ神に出逢う。

神武東征伝承で、熊野は荒ぶる神のいる異郷として表現されている。その点では吉野も同様である。吉野の國つ神も、荒ぶる神でこそないものの、尾が生え、名を問わなければ正体の分からぬようない神である。共に未知の神のいる異郷である。

熊野と吉野とが共通してミを冠される機縁はおそらくここにある。カムヤマトイハレビコ率いる大和を中心と考えた場合、大和盆地から見て最も身近な異郷が吉野であり、大和國から見て最も身近な異郷が熊野だったのであろう。

接頭語ミは「山つみ」「海つみ」など原始的な靈格を表す名詞ミからの転用であるとされる。「み吉野」「み熊野」のミには、その原義が響いていると見るべきである。

反王権的な異郷という点で、熊野と出雲との類同性が指摘されることがある。事実、(1)に見られるように出雲にも熊野の地名が存し、性格の類似から両者が混同されることもある。しかし、「ひとしく反大和朝廷的性格の土地とはいつても、紀伊熊野は出雲ほどに政治的勢力があつたわけではない」とされるよう、出雲には政治的勢力があり文化があつた。原始的靈格の國つ神がいるような土地ではない。それゆえ「み出雲」とは言いた得なかつたのである。

(2)その他に分類される神話・伝承は次のa～dであるが、これからも熊野を異郷・異界とする認識が窺える。

a 死んだイザナミを「紀伊國の熊野の有馬村」に葬った。

(c) 三毛入海命が「熊野の神邑」で「浪秀」を踏んで「常世郷」に行つた。

(d) 皇后磐之媛が「熊野の岬」に「御綱葉」を取りに行つた。
〔日本書紀〕神武天皇即位前紀戊午年六月

b 少彦名命が「熊野の御崎」から「常世郷」に行つた。
〔日本書紀〕神代上・第八段・一書第六
世郷へと渡つてゐる。黒潮洗う熊野灘に面する熊野が、海の彼方の常世への入り口たる異界として認識されたことは想像に

難くない。^[5]

aで熊野がイザナミの葬地とされているのも、熊野を他界に接する地とする認識を示す。dで磐之媛が新嘗祭に使用する「御綱柏」を熊野まで取りに行つたのは、常世の呪力を将来するためであらう。

①の「み熊野」はかかる認識を基盤として成立したと考えられる。

「み熊野の浦」の彼方には常世郷があり、海中他界たる常世からは「常世の浪の重浪」^[6]がうち寄せる。その白い波頭を「浜木綿」に譬え、幾重にもうち寄せる波を序詞として、募る恋情を表現したのである。

恋情が「み熊野」の浜辺にうち重き寄せる常世浪によつて表現されているとすれば、それは「疊みかけるごとく次々と浜に打ち寄する太平洋の白波」や「熊野灘のみなぎるばかりのエネルギー」^[7]によつて喚起される間断のなさや激しさだけではあるまい。

未知の異界から寄せる重浪の不可思議、それが人間の意志では制御できない恋愛の印象と重ねられている。繰り返し寄せる不可思議な浪が、募りに募る恋愛のどうしようもなさをイメージさせる。

「み熊野」は、人の秩序下にはないそつした恋愛の表現を可能にする歌語であつたと考えられる。

一方、「ま熊野」はどうか。

②③は共に熊野の船を詠む歌である。紀伊の熊野は造船の地であつた。そのことが前掲の(回船)に關わる神話・伝承に示され

ている。

e 国譲りの諾否を問う使者が「熊野の諸手船」に乗り、出

雲國三穂の崎で釣をしていた事代・主神の所へ行つた。

(『日本書紀』神代下・第九段・正文)

(『伊予國風土記』逸文)

f 昔「熊野」という船がそこで造られ今は石となつてい

る、という伊予國野間郡の「熊野の岑」の地名起源譜。

g 孝謙天皇の時代に「紀伊の国牟婁の郡熊野の村」の人があ

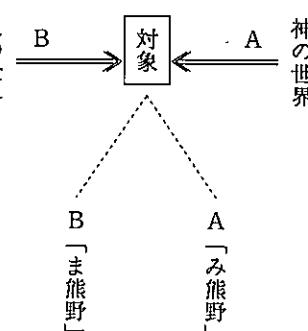
「熊野の河上の山」で木を伐つて船に造つた。

(『日本靈異記』下巻・第一話)

岸俊男氏は、古代豪族紀氏が大和朝廷の外征軍の主力となつたことを推論し、木材や造船に関する史料を検討して、紀氏台頭の背景に、その本貫である紀伊に豊富な船材(クス)があつたことと、外洋航行に耐える大型船の造船技術があつたことを述べている。

岸氏は、e 「熊野の諸手船」は出雲の熊野と混同されがちであるが本来は紀伊の熊野の船であつたとし、「熊野」という船であり航海術であつた^[8]とされるように、未知の異郷熊野という認識に対し、造船の地熊野という認識は比較的新しいものであろう。

「ま熊野」という歌語はその認識に基づいて成立したと考えられる。



神のことば・人のことは
神のことば

歌語の成立過程で、対象となることばを捉え返す技法は、「見る捉え方」と人の側から見る捉え方の二つの方向性が想定できることを述べてきた。

人の世界の事象を根拠としてことばを捉え返す技法は、「万葉集」に新しい歌語生成の道を切り拓いたと考えられる。

例えば、大伴家持の用いた「思ふどち」という語がそうである。

新沢典子氏は、日本書紀歌謡で一例、「万葉集」で十五例見られる「～どち」の語を検証し、本来「～と一緒に」の意であつたものが「同士」「仲間」といった複数の人間集団の意に転じ、家持によって「思ふどち」の語が「斬新な文化の担い手たる風流人集団としての自負によつて連帶する越中下官らの世界」を指す特殊な表現となる過程を論じて説得的である。かつ

て拙稿でも家持の「思ふどち」は、越中における池主らとの「過去の細やかな交友の時間を包含する語」であると述べたことがある。

つまり、「思ふどち」は、越中における歌壇乃至文学圏で

も呼ぶべき人間の集団の中の事象を根拠として成立している歌語なのである。

そして更に重要なのは、この語の背景に漢詩文の存在があることである。「思ふどち」が直接に如何なる漢語に擬つていたかについては諸説がある⁽²⁾が、いずれにせよ家持・池主の学んだ中国文学における交友の概念に基づくことは確かであろう。

家持・池主らの越中における交友は、中国の交友詩の世界の側から捉え返され、「交友歌」に使用される歌語「思ふどち」が成立したのである。

越中における交友 → 捕え返し 「思ふどち」

漢詩文の世界

中国文学と日本文学には、東アジアにおける均質性があると同時に超えがたい彼我の異質性がある。漢詩文を攝取して新たな和歌文学を創造するには、一旦、捉え返しの過程を経る必要があった。「思ふどち」の如く和語に新たな意味を付与して歌語とする場合は勿論のこと、詩語をそのまま和歌に用いる場合にもそぞうした過程はあつたと考えられる。

かし越路は地方・地域として広がりを持ち、ピンポイントとしての特定の地名ではない点で吉野・熊野とは異なる。

(4) ここでいう歌語とは、「日常語と同じ形であつても、和歌に詠まれることによって、意味内容や用法が固定化・型化し、情趣や美意識が附加した語」[小町谷照彦氏「歌ことば・歌枕」]〔国文学解釈と教材の研究〕三〇一—一〇、昭和六〇年九月〕といふ程度に緩く規定しておきたい。

(5) 「出雲國風土記」に「熊野加武呂の命」(意宇郡)、「熊野の大社」(意宇郡)、「熊野山」(意宇郡)、「熊野の大神」(意宇郡、鳴根郡)、「出雲國造神賀詞」に「かぶろき熊野の大神」の例がある。

(6) 「出雲國風土記」(古事記)、「熊野櫟樟日命」(日本書紀)第六段・正文)、「熊野忍踏命」(同第六段・一書第一)、「同熊野忍踏命」、「熊野忍隅命」(同第六段・一書第三)、「熊野大角命」(同第七段・一書第三)。

(7) 西郷信綱氏「古事記の世界」(昭和四二年九月)

(8) 和田萃氏「熊野の原像」(日本古代の儀礼と祭祀・信仰下)平成七年六月)

(9) 和田萃氏「古代の吉野」(日本古代の儀礼と祭祀・信仰下)平成七年六月)は、「國中(盆地部)一筆者注」とは異なる風土と歴史を有するとの意識」が吉野にあるとする。

(10) 「岩波古語辞典」
(11) 越も「國つみ神」(巻十七・三九三〇)があり、「しなざかる越」「天離る鄙」と歌われる土地である」とから、「みる風土と歴史を有するとの意識」が吉野にあるとする。

(12) 西郷信綱氏「古事記の世界」(注7前掲)

(22) 「岩波古語辞典」

漢詩文の世界は人の世界の範疇であった。人の世界の事象を起源を否定する契機となつたのは、「我が恋」が慰められない「個」の意識に根ざしたものであることを示している。へんのことは「我のことは」として的一面を持つ。八世紀の万葉歌は、「我」を表現する新たな「ことば」を必要としていたのである。

結

先に掲げた大伴坂上郎女詠で、神のことばを根拠とする地名を捉え返す技法は、漢詩文を和歌に取り込むことを可能にしたのである。

右のような方は、人の世界の側から捉え返すという技法が「個」の意識に根ざしたものであることを示している。へんのことばは、「我のことは」として的一面を持つ。八世紀の万葉歌は、「我」を表現する新たな「ことば」を必要としていたのである。

注(1) 「そらみづ」の起源説の解釈、及び「捉え返す」という

タームは、近藤信義氏「音韻論」(平成九年一二月)に依拠している。

(2) 小野寺靜子氏「名児山を越ゆる歌」考」(坂上郎女と家持・大伴家の人々) 平成一四年五月)は、この歌が旅の歌として異質であることを指摘して、坂上郎女が自らその地名起源を創出したとする。

(3) 他に「み越路」(巻九・一七八六、巻十五・三七三〇)の例があり、これもミの付く地名とすることができる。し

(13) 森浩一氏「海人文化の舞台」(「海と列島文化」8 伊勢と熊野の海) 平成四年一月)の指摘。

(14) 村山修一氏「熊野信仰と海洋信仰」(「海と列島文化」伊勢と熊野の海) 平成四年一月)

(15) 和田萃氏「熊野の原像」(注8前掲)、村山修一氏「熊野信仰と海洋信仰」(注14前掲)などの指摘するところである。

(16) 「神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する國なり」(「日本書紀」垂仁天皇二十五年三月十日条)という表現がある。これは伊勢国についての言であるが、常世信仰のある但馬国に式内社「重浪神社」があることなどから、伊勢に限らず常世信仰は「重浪」を伴うものであったと考えられる。

(17) ①の「浜木綿」には植物とする説と白波の譬喩とする説とがあり、坂本信幸氏「紀伊の人麻呂歌四首」(セミナー万葉の歌人と作品 第二卷 柿本人麻呂(一)) (平成十一九年九月)に詳しい。紙幅の都合上その詳細に触れる余裕はないが、波の叙述を序詞として感情を表現する例の多いこと、白波を木綿に譬える例のあることから白波説をとる坂本氏の意見に従いたい。

(18) 坂本信幸氏「紀伊の人麻呂歌四首」(注17前掲)
一年五月)

(19) 村瀬憲夫氏「熊野の歌」(「紀伊万葉の研究」平成七年一月)

(20) 「紀氏に関する一考察」(「日本古代政治史研究」昭和四一年五月)

(21) 村瀬憲夫氏「熊野の歌」(注19前掲)

(23) 「越中における「おもふどち」の世界」(『美夫君志』六
二、平成二三年四月)

(24) 「家持の〈交友歌〉」(『古代文学』三七、平成一〇年三
月)

(25) 吳哲男氏「万葉の『交友』——大伴家持と同性愛(一)」

「『交友』——大伴家持と同性愛(二)」(『古代日本文学の制度
論的研究』平成一五年一月)は、「交友」に基づく語と見
る。佐藤隆氏「遊覽布勢水海賦と立山賦」(『大伴家持作品
論説』平成五年一〇月)は、「淡交」「蘭蕙」「蘭契」とい
つた漢語を置き換えたものとする。

(26) 漢詩文の世界の事象全てが歌語の根柢と成り得たわけで
はない。漢詩文の世界が人の世界である以上、神の世界と
抵触する事物は歌語とすることができなかつたと考えられ
る。そうした事例については別稿の用意がある。